

豚熱 いまだ爪痕深く

愛知 感染確認から1年

廃業も検討／消費拡大へつとめ

愛知県内の養豚場で家畜伝染病「豚熱（CSF、豚コレラ）」の感染が確認されてから、6日で1年となる。1年で県内養豚場の4分の1が全頭殺処分を経験し、業界は打撃を受けた。養豚を再開した農家もあるが、歩みはまた厳しい。

昨年2月6日に感染が判明したトヨタファーム（豊田市）。今年1月、10頭の食用豚が約1年ぶりに出荷された。1月の出荷頭数は30頭。感染発生直前は月に約2千頭だった。

西尾市吉良地区の養豚団地。四つの養豚場が集まるが、豚は1頭もない。1月末、養豚農家の斎藤隆宏さん(42)が、堆肥場の様子を見に訪れた。

昨年6月、斎藤さんとは別の養豚場と関連施設で、豚22頭から陽性反応が出た。団地で浄化槽やタンクカーを共用しており、斎藤さんの豚を含む約7800頭が殺処分になった。

昨年11月には、再開しようとした矢先に市内の別の養豚場で再び豚熱が確認され、再開は自粛した。



トヨタファームの豚舎。豚は約850頭にまで回復した。愛知県豊田市堤本町、畑柄雄一さん提供

昨年7月に経営を再開したが、昨年9月に肝を冷やす出来事があった。5、6頭の豚が食欲をなくした。「もし、CSFの再発生だったら、養豚をやめるしかない」と覚悟を決めていたが、翌日に出た検査結果は陰性。それまで生きた心地がしなかった。

近隣の養豚団地で感染が確認され、約3700頭の殺処分を受け入れた瓜生陽一さん(54)は「養豚業はすそ野が広い地場産業。生産者があきらめたら、みんなが困る」と昨年9月から飼育を再開した。

近隣農場での感染を理由に約3200頭の殺処分に応じた畑柄信人さん(52)も昨年11月に豚の導入を再開。えさ代などの初期投資につき融資や助成金を充てる。

養豚農家によると、感染防止のワクチンを接種した豚肉の流通が始まっている。3日に市内のホテルであった「農業者のつとめ」では、「消費拡大に」と著名な料理研究家が考案した田原産豚肉使用のロールキヤベツが振る舞われ、好評を博した。

つとめに参加した養豚農家の鈴木伸也さん(35)は「ASF（アフリカ豚熱）や口蹄疫など別の伝染病が今後もないとはいえない。気を緩めず、防疫体制を強化していきたい」と話す。

（小山裕一 小川崇 床並節二）